

1 本研究の意義

近年、東アジアの日中韓3国の間では歴史認識の問題が起きており、各国間の親善を阻害している。日本に関しては、韓国に対する植民地支配の問題と中国に対する戦争責任の問題があり、ともに現在の日本の対外関係にとって大きな足かせとなっている。このような問題に対し、歴史家は直接に解決のための道筋を提示することはできないにしても、史料にもとづいて事実を明らかにすることはでき、そのことは歴史認識の問題の解決に寄与するものと著者は確信している。

さて、そのような歴史認識問題での渦中のひとりが寺内正毅である。

寺内は、陸軍において陸軍長州閥を継承した人物である。そして、1910年には韓国統監として現地で韓国併合を進め、併合後はそのまま朝鮮総督に横すべりとなり、1916年まで務めた。すなわち、日本による初期朝鮮統治を形成した人物である。そして、1916年には総理大臣となって、1918年までのいわば第1次世界大戦後半期に総理大臣を務める。寺内内閣期には総力戦体制への模索が始まり、また1918年には10月革命後に成立したボリシェヴィズム政権に対しシベリア出兵という干渉戦争にふみきった。このように、大正政治史や初期朝鮮統治、ならびに陸軍などを考えるうえで、寺内は最重要人物のひとりに位置する。

さらに、寺内は総理大臣クラスで、4000点以上という大部の一次史料群が存在し、それも翻刻が部分的にしかなされていないという点で、これから研究を飛躍的に前進させる可能性を秘めた研究対象であるといえる。

さらに、寺内にはそもそもしっかりとした伝記がないため、一次史料である「寺内正毅関係文書」の翻刻・共同研究の意義がより高まるのである。ちなみに、同じ長州出身で陸軍をバックに政治の世界へ進出した山県有朋や桂太郎には、徳富蘇峰（猪一郎）による伝記¹が存在する。これら戦前の伝記は政治家の顕彰が目的なので取り扱いに注意が必要なのは当然であるが、しかし蘇峰による伝記は史料を整理し、場合によっては関係者から書翰などを借りてきたり、聞き取りを行ったりしたうえで作成されたものなので、伝記に収録されている史料は利用価値が高かったりする。それに対して、寺内の伝記²は、寺内の死後すぐの倉卒の間に編纂されたもので、一次史料はほとんど使われておらず、あまり使い物にならない伝記となっていることもあって、逆に一次史料である「寺内正毅関係文書」の価値を高めることになるのである。

2 桜圃寺内文庫

「寺内正毅関係文書」は、現在大きく3つの機関に分散して保存されているが、その経緯を知るためには、まず桜圃寺内文庫³の経緯を見なければならない。桜圃寺内文庫に関する詳細は伊藤幸司氏による研究に譲るが、本報告書では行論の関係上、必要な点のみ触れておきたい。

寺内正毅は郷土山口の子弟に所蔵図書を閲覧せしめ、防長の土風を伝えるための文庫開設を企図していた。しかし、正毅は1919年11月に死去したため、正毅の長男で嗣子の寿一が遺志を継いで、1922年2月に桜圃寺内文庫を建設・開庫した。桜圃寺内文庫は寺内家の私設図書館であり、教育図書館という正毅本来の構想に正毅記念館的な側面が加えられることになった。文庫には一般

書のほかに中国朝鮮関係古書、上原勇作寄贈の洋書も多数あった。

さらに、後述のごとく、2階の陳列室（宝物室）には、天皇の下賜品などの貴重品が安置されており、その中に「寺内正毅関係文書」も含まれるようになったと推測される。すなわち、桜園寺内文庫の開庫にあたっての『防長新聞』1922年2月5日の記事には、陳列室には次のようなものが置かれていたことがうかがえる。

◇陳列室（伯爵家寶物並に貴重品室）には前号所載の如く明治天皇昭憲皇太后陛下よりの御下賜品数種及び今上天皇皇后両陛下御下賜品数種、李王家より拝領品数種と故元帥の遺物愛好品数十点の外に、畏くも先帝陛下並に今上陛下より親しく故元帥に御下賜あらせられた御真影と共に昭憲皇太后皇后両陛下の御真影安置されあるを以て一般に公開せず。⁴

さらに、この2年後の1924年に佐藤範雄（金光教の信者、金光教団組織化を推進）が桜園寺内文庫を訪問したときの記録には、次のような記述があるという。

宝物室

仰げば室の正面には、両陛下の御真影あり、左方には明治大帝の御聖影が掲げられてある。襟は自ら正され再拝して参入した。

明治大帝、昭憲皇太后、今上陛下よりの御下賜品の数々は、今記すもいと畏れ多く、それはそれは筆にも口にも尽し得ぬ貴重な尊いものばかりであった。一々品名説明を拝して行く中に、李王家よりの御下賜品、金の茶釜、銀の爐、其の他貴い物が拝された。

御下賜の元帥刀の前に、大勲位菊花大綬章より、各種の勲章を胸間眩ゆき迄に吊るされたる元帥服を拝する時、元帥の勲功の如何に偉大なりしかを思はずには居られない。胸間に吊すことの出来ない、他の多くの勲章は、元帥の左右に正しく并べられ、燦として輝いて居る。中には横文字入りの外国勲章もあった。

伊藤博文、大久保利通、木戸孝允、西郷隆盛、山県大将、乃木大将其の他勤王の士の往復書信、或は詩歌等鄭重に保存せられてあった。元帥の遺墨に至っては、色紙に、幅にそれはそれは墨痕鮮かなるものである。

また、佐藤は文庫を辞するにあたり、壁間に掲げてあった寺内宛て乃木書翰および歌を、文庫主管（宇佐川三郎）の許可を得て筆写したという⁵。

その後、桜園寺内文庫は、文庫に隣接して1941年に設立された山口女子専門学校（1950年新制の山口女子短期大学に編制替え、1975年山口女子大学に昇格、1996年共学化により山口県立大学へと名称変更）の学生が図書館として利用する必要性と、庫主寿一がマレーシアのレンガムで拘留中に病死（1946年）したことともなう寺内家の文庫維持困難とがあわさって、1946年に山口県と寺内順子氏の間で「桜園文庫貸借契約書」が締結された（その後、文庫隣接の朝鮮館の倒壊や物価騰貴による借料変更の必要などから、1952年に改めて貸借契約書が取り交わされた）。桜園寺内文庫の借用期間（1956年11月末日まで）を迎えるにあたり、山口女子短大からすれば付属図書館として永く利用したい希望もあり、県も文庫を県有財産にする意向を固めた。寺内家との交渉の結果、山口県と寺内順子氏との間で売買契約書が締結され、1957年1月に文庫建物・土地・樹木が県に移管された。あわせて、文庫蔵書に関しても県・大学の希望を了解して、寺内家は同年3月に図書、書画・写真帳、備品類の寄付採納願を提出した。

このように、桜園寺内文庫所蔵の資料（伊藤氏作成の図「桜園寺内文庫旧蔵資料の所蔵先」⁶も参照）に関しては、その形態にあわせて山口県（山口県立女子短大）に移管されたもの（図書、書画・

写真帳)、山口女子大学から韓国慶南大学校へ「寄贈」されたもの(朝鮮書画類)、寺内家所有のまま文庫に保管されて、後に山口県立山口図書館に寄贈・寄託されたもの(朝鮮関係蔵書)に分かれた。さらに、1946年の貸借契約ないし1957年の売買契約の際、契約の対象とはならず、山口市の寺内文庫から神奈川県大磯町の寺内家本宅に引き上げられた史資料群もあった。正毅を顕彰する目的で文庫の陳列室で陳列されていた正毅ゆかりの文物や資料こそがそれであると、伊藤幸司氏は推測する⁷。

3 新出史料の発見

その後、1964年に、寺内家から国立国会図書館憲政資料室に史料が寄贈された。

現在、憲政資料室に所蔵されている「寺内正毅関係文書」がそれである。同文書は整理のうえ、目録(『寺内正毅関係文書目録』)が刊行された。

ちなみに、山口県の防長尚武館にも資料があるが、それは勲章・勲記、軍服・軍刀、写真などといったモノ資料が中心である。

このように全貌が明らかにならないほどの大部の史料群である憲政資料室所蔵の「寺内正毅関係文書」であるが、実はそれで全てではなかったのである。すなわち、近年になって、大磯の寺内家にかんがりの資史料が残存していることがわかり、それら寺内関係史料が、寺内多恵子氏から、山口県立大学と学習院大学史料館に分かれて寄贈された。寺内多恵子氏は寺内順子氏の姪にあたり、寺内寿一・順子夫妻に実の娘のように育てられ、そのまま寺内家を継いだ人物である。

まず、山口県立大学への寄贈の経緯を述べると、当時山口県立大学に勤務し、同大学付属図書館に伝来していた桜圃寺内文庫の研究を進めていた伊藤幸司氏が、関連する資料が寺内家に残されていないかを確認するために私信を出したところ、寺内多恵子氏から連絡があり、2012年10月に永島広紀氏とともに大磯町の寺内家を訪問して、資料確認を行ったという。結局、伊藤氏が受け入れの責任者となって「寺内正毅関係資料」の山口県立大学への移管が行われ、2014年1月には寺内多恵子氏の出席のもと寄贈式が開催された⁸。

一方、同じ頃の2013年5月に、学習院大学史料館の長佐古美奈子氏と、学習院大学の千葉功・長谷川怜が大磯の寺内家を訪問し、その結果、翌6月に学習院大学史料館に「寺内正毅・寿一関係資料」が寄贈された。これはアジア太平洋戦争後の桜圃寺内文庫の山口県への貸借・売買契約の際に大磯の寺内家へ引き上げられたモノ資料のうち、防長尚武館へ寄託・寄贈された軍事関係資料以外のモノであろう。

4 「寺内正毅関係文書」の概要

寺内家から、1964(昭和39)年に寄贈された国立国会図書館憲政資料室所蔵「寺内正毅関係文書」は、総計3395点からなる一大史料群である。総理大臣クラスでこれだけまとめて史料が伝来するのも稀であり、それだけでとても貴重なものである。山口県立大学附属図書館の「寺内文庫」には、憲政資料室の「寺内正毅関係文書」と類似しながら重複していない資料が若干伝来しており、このような伝来状況から伊藤幸司氏は「神奈川県の寺内家から寄贈された憲政資料室の寺内正毅関係文書は、もともとは山口の桜圃寺内文庫に一括して保管されていた可能性が非常に高い」と結論づけている⁹。寄贈史料は整理され、憲政資料室の藤井貞文・有泉貞夫氏によって詳細な目録が作成された(国立国会図書館参考書誌部編『寺内正毅関係文書目録 付岡市之助関係文書目録』、国立国

会図書館、1971年)。

「寺内正毅関係文書」は書翰の部と書類の部に大別される。

書類の部は、「北清事変」「朝鮮関係」や「寺内内閣」「西原借款」といったふうに、内容によって分類されている。書類の部については、山本四郎氏によって既に主要部分は翻刻済みである。すなわち、日記のうち北清事変(義和団戦争)以降から寺内死去までの分は山本四郎編『寺内正毅日記1900-1918』(京都女子大学、1980年)として、書類のうち寺内内閣期以前のは山本四郎編『寺内正毅関係文書 首相以前』(京都女子大学、1984年)として、寺内内閣期のは山本四郎編『寺内正毅内閣関係史料』上下(京都女子大学、1985年)として、それぞれ翻刻されている。

しかしながら、書翰の部、すなわち寺内に宛てられた膨大な書翰群については、点数が多い(総計2651点)うえにくずし字で書かれていることもあって、部分的に翻刻されるにとどまっている。本来は、書類を山本四郎氏が、書翰を藤井貞文氏が分担してそれぞれ翻刻し、日本史籍協会叢書として東京大学出版会から刊行予定であったが、書翰のかなりの部分が翻刻済みのところで藤井貞文氏が死去したため、刊行が頓挫したという(山本四郎氏も当時勤務していた京都女子大学の研究叢刊として書類編を刊行した)。

その後、寺内正毅宛て書翰のうちごく一部の発信者の分は、次のように翻刻されている。

尚友倶楽部史料調査室・広瀬順皓・日向玲理・長谷川貴志編『寺内正毅宛明石元二郎書翰 付『落花流水』原稿(『大秘書』)』(尚友倶楽部〈尚友ブックレット〉、2014年)

千葉功編『桂太郎発書翰集』(東京大学出版会、2011年)

長井純市・馬場宏恵「寺内正毅宛杉山茂丸書翰紹介」『法政大学文学部紀要』68号(2014年)

尚友倶楽部史料調査室・伊藤隆編『寺内正毅宛田中義一書翰』(尚友倶楽部〈尚友ブックレット〉、2018年)

吉田茂記念事業財団編『吉田茂書翰』(中央公論社、1994年)

また、憲政資料室が作成した詳細な目録である『寺内正毅関係文書目録』も、書翰の部のうちB群に対する目録の取り方が簡略過ぎるため、書翰の内容の点においても、実は全貌がわからないのである。すなわち、『目録』は「政治・軍事・外交関係などの書翰をふくむ発信人のもの」はA群に、「私的・儀礼的書翰のみの発信人のもの」はB群に分けている。A群(2229通)は、日本人書翰2127通、朝鮮・中国人書翰61通、寺内正毅書翰案32通、第3者間書翰9通からなる。また、B群(533通)は、日本人書翰422通、欧米人書翰111通からなる。そして、『目録』は、A群に関しては発信人名・年代・内容・書翰中にあらわれる人名を摘記するが、B群に関しては発信人名・数量を記すにとどまっている。しかしながら、B群がそもそも私的・儀礼的書翰のみで構成されているかを悉皆確かめた者はおそらくなく、実は政治・軍事・外交などの情報を含む書翰がB群の中に入っている可能性がある。また、たとえB群が結局のところ私的・儀礼的な書翰だけだったとしても、それはそれで寺内の人間関係を押し測るうえで貴重な書翰だといえよう。

次に、近年、寺内家から山口県立大学へ寄贈された「新出史料」である「寺内正毅関係資料」は、史料受け入れの責任者となった伊藤幸司氏が中心となって、彼の母校である九州大学の関係者をも動員して整理と目録化を進められた。その結果、一紙・冊子之部862点、軸巻之部15件40点、写真之部43件46点の総計948点にのぼることが判明した。また、史料整理・目録化の成果を社会に還元するため、2014年1月29日・2月2日に山口県立美術館講座室にて特別展「宮野の宰相・寺内正毅とその時代—桜園寺内文庫への新規寄贈資料展—」を展示するとともに、2月1日には山

口県立山口図書館にてシンポジウム「桜圃寺内文庫の可能性—新出資料が語る近代日本—」を開催した。「寺内関係資料目録」は、シンポジウムの記録や資料展の展示解説、乃木希典書翰の解説とあわせて、伊藤幸司・永島広紀・日比野利信編『寺内正毅と帝国日本 桜圃寺内文庫が語る新たな歴史像』（勉誠出版、2015年）として刊行された。

学習院大学史料館所蔵となった「寺内正毅・寿一関係資料」（65件 447点）のうち正毅関係は、総計 35点である。文字資料は軸物 13点など少数であるが、例えば 1910（明治 43）年、韓国併合の前後に山県有朋が寺内に宛てて送った書翰 2 通¹⁰や、乃木希典が殉死する直前に書いた書翰¹¹など、貴重な史料が含まれている。また、高価なモノ資料が多いことも特徴であり、蒔絵硯箱・平箱、螺鈿文台、ボンボニエールなどからなる¹²。さらに、寿一の関係史料 412 点もあわせて寄贈された。この「寺内寿一関係史料」は、書類・辞令・位記・感謝状などからなり、従来一次史料がほとんど世に出ていなかった寿一を研究するうえで大きな価値を発揮するであろう。学習院大学史料館では 2014 年 9 月 27 日-12 月 6 日の期間に、所蔵の史資料から「桜圃名宝展」を開催した。このうち、漆芸品に関しては、『桜圃名宝 【漆芸編】』というフルカラーのミニ図録を発行した。また、「桜圃名宝展」とあわせて、講師に伊藤幸司氏を招いて、10 月 3 日に史料館講座「桜圃寺内文庫の誕生とその後」が開催された。これら寺内正毅・寿一関係資料の目録は、前掲の山県書翰など主立った史資料の解説文とあわせて、2015 年 3 月刊行の『学習院大学史料館紀要』第 21 号に掲載されている。

山口県立大学と学習院大学史料館の 2 つの機関の史料は、憲政資料室所蔵分とは別途、大磯の寺内家に保存されてきたもので、まったくの新出史料である。言い換えれば、国立国会図書館憲政資料室とあわせて、これら 3 つの機関の史料群は、いわば「泣き別れ」の状態にあるともいえる。よって、3 機関の史料群を統合して、横断的に翻刻し、それにもとづいて共同研究を行うことによって、多くの知見を得ることができるであろう。

5 発信者の概観

それでは次に、「寺内正毅関係文書」の書翰群の発信者を概観することで、本関係文書の性格を考えてみたい。

まず、別格で多いのが、122 通の山県有朋である。このうち、2 通は近年学習院大学史料館へ寄贈されたものだが、それは韓国併合前後のものである。山県は元老かつ陸軍の長老として、寺内ないし寺内内閣の後見を自任しており（寺内が山県に、いつまでも子供扱いすることに不平をもちたという有名な逸話がある）、山県からの書翰数が多いのもうなずかれる。

さて、寺内は、山県有朋—桂太郎—児玉源太郎—寺内正毅と、長州系陸軍主流派に連なり、日露戦後をはさんだ約 10 年間陸軍大臣を務め、「寺内体制」¹³と呼ばれるほどの影響力を発揮した。このような陸軍内における寺内の位置づけを反映して、「寺内正毅関係文書」書翰の部には、山県有朋（122 通）、田中義一（77 通）、石黒忠恵（73 通）、大島健一（45 通）、長谷川好道（45 通）、桂太郎（40 通）、立花小一郎（37 通）、上原勇作（36 通）、真鍋斌（35 通）、大島義昌（34 通）、福原豊功（30 通）、児玉源太郎（26 通）、大久保春野（24 通）、岡市之助（22 通）、長岡外史（21 通）、宇都宮太郎（18 通）、大庭二郎（15 通）、一戸兵衛（14 通）といったように、陸軍長州閥関係者からの書翰が多く含まれている。これら書翰群からは明治・大正期における陸軍の詳細、特に政治との連関性を明らかにしてくれるであろう。ちなみに、乃木希典の 11 通は主に乃木自決前のもので、

興味深い。

次に目につくのが、寺内内閣の閣僚からの書翰である。すなわち、後藤新平（66通）・大島健一（45通）・勝田主計（36通）・児玉秀雄（25通）・仲小路廉（19通）となっている。第1次世界大戦期を寺内と2分して内閣を担った大隈重信宛ての書翰群が、近年、『大隈重信関係文書』として翻刻され、全巻完結した¹⁴ので、これら史料群とあわせ見ることによって、「第1次世界大戦と日本」という観点からかなりのことが明らかになるはずである。

また、寺内が韓国併合の現場責任者として韓国併合前後の韓国統監・朝鮮総督をつとめたことからわかるように、朝鮮関係者からの書翰が多く含まれている。例えば、明石元二郎（89通）、長谷川好道（45通）、山県伊三郎（44通）、立花小一郎（37通）、児玉秀雄（25通）、大久保春野（24通）、小松緑（24通）、宇佐美勝夫（17通）、大城戸宗重（13通）などである。これら書翰群は寺内の朝鮮統治の実態を、韓国併合前後を横断する形で明らかにしてくれるであろう。

ちなみに、寺内文書の中には中国関係者からの書翰も多く、特に、西原借款を担った西原亀三（34通）や坂西利八郎（20通）の書翰が多い。既に先行研究¹⁵において、朝鮮総督である寺内は満州への日本勢力の伸張と、朝鮮・満州の横断的統治に積極的で、いわゆる「鮮満一体化」構想を抱いていたことが指摘されているが、「寺内正毅関係文書」の翻刻によって、満州支配との連関性をも明らかにすることが期待される。

他にも、一時期までは良好な関係にあった徳富蘇峰（67通）、後藤新平系の政界浪人である杉山茂丸（45通）などもあって、さまざまな新知見を与えてくれるであろう。

6 「寺内正毅関係文書研究会」の立ち上げと『寺内正毅関係文書』第1巻の刊行

前述のような状況をふまえて、千葉は多くの研究者の賛同と参加をえて、2015年に「寺内正毅関係文書研究会」を立ち上げた。研究会への参加者は徐々に増え、2018年6月時点での研究会のメンバーは次の通りである。

青木健史、赤司友徳、飯島直樹、伊東かおり、伊藤幸司、上田和子、小倉徳彦、加藤祐介、草野泰宏、熊本史雄、小林篤正、佐々木恵海、佐藤大悟、下重直樹、陣内隆一、季武嘉也、千葉功、長佐古美奈子、永島広紀、西山直志、野島義敬、長谷川貴志、長谷川怜、原口大輔、韓相一、日向玲理、藤澤恵美子、藤澤匡樹、山口輝臣、芳澤直之、吉廣さやか

さらに、その後、2019年11月現在で下記の4名が新規に参加することになった。

大江洋代、加藤祐介、下重直樹、松田好史

この「寺内正毅関係文書研究会」は、参加者で書翰の翻刻と原典校正を行うとともに、年2回ペースで研究会を開催して、翻刻された寺内文書からわかることや関連した内容の報告を行うことで共同研究を進めている。その結果、寺内正毅宛て書翰に関しては、大部なので全5巻に分け、そのうちの第1巻（発信者が青木周蔵～大久保春野）を無事、2019年2月に刊行することができた（寺内正毅関係文書研究会編『寺内正毅関係文書』第1巻、東京大学出版会、2019年）。また、続く第2巻（発信者が大隈重信～後藤新平）に関しては2019年の夏に翻刻原稿をとりまとめ、2020年度中に刊行すべく作業を進めている。

7 「寺内正毅と近代日本」

それでは、本研究によって明らかになった知見をふまえて、寺内正毅の歩みを近代日本の歴史の

中に位置づけて、以下叙述したい。ただし、紙幅の関係上、概略的なものにとどまることになる。また、できるかぎり同時代史料であるところの寺内本人が発した書翰と、寺内本人の性格がうかがえるものとしての寺内死去後に寺内を回想した文章を中心として、見ていきたい。

○出生と幕末・明治初期の寺内正毅

寺内正毅は、嘉永5年2月5日、長州藩士宇多田庄兵衛3男の宇多田寿三郎として生まれ、のち寺内勘右衛門の養子となる。幼少の頃よりガキ大将で、負けず嫌いであったという¹⁶。

幕末においては、大田・絵堂の戦いで多治比隊、幕長戦争では御楯隊、箱館戦争では整武隊に所属して、戦功を挙げた。明治になって、整武隊を率いていた山田顕義の口利きで、フランス式歩兵学修業のため河東操練所内仮屯所に入所、途中御新兵に採用されて上京、明治5年3月には大尉で近衛兵4番大隊兵となる¹⁷。

しかし、明治5年3月付で教導団に戻される。寺内はこれを左遷と受け取り、出勤しなくなり、6月には兵学寮の管轄に置かれる。事実上の休職であった。堀雅昭氏は、寺内の師大楽源太郎の関与した事件への取り調べが進み、門下生として疑いの目を向けられた可能性を示唆する¹⁸。

寺内は、1873年8月、開設されたばかりの陸軍兵学寮戸山出張所（翌年、「戸山学校」と改称）へ入所、卒業翌年の1875年1月、士官学校生徒司令副官となる¹⁹。しかし、当時の寺内は、諸先輩の施政施設と意見を相違したために、「万石の不平」を抱いていたという²⁰。

当時、品行点の極端に低かった長岡外史によると、生徒の間では最も「やかましい人」として知られていた。ただし、長岡が重営倉時に友人から差し入れられたビールを飲んだのが露見したときも、火を発するばかりに叱責したが、内済として、重営倉の追加はしなかったという²¹。

○西南戦争

1877年2月、西南戦争が勃発すると、寺内は前線への出征を強く希望、近衛歩兵第1連隊第1大隊第1中隊長として田原坂口正面の戦線に出陣した²²。そして、田原坂の戦いで右上腕部を撃たれ、大阪臨時陸軍病院へ後送された。院長で執刀医が佐藤進、副院長が石黒忠憲であった。当初、寺内の腕は切断する予定だったが、寺内が大粒の涙を流し、おれは軍人じゃ、片手を切られるぐらいなら、いさぎよく戦場に屍をさらして来たのにと嘆いたので、温存治療が施されたという²³。以後、右手が使えなくなった寺内は、軍政と陸軍教育の分野で能力を発揮することになる。

ちなみに、寺内は総理大臣となった直後に佐藤と石黒を浜町常盤に招待したが、それは、自分が今日あるのはまったく明治十年の戦役で陣亡すべき身を、佐藤・石黒の両氏の手当てが行き届いていたため「再生」することができたからで、居にその恩義を銘記して忘れる暇もなかったという²⁴。

西南戦争後は士官学校生徒大隊副官・司令官を経て、士官学校生徒司令官となる。エピソードとして、寺内は「昨日の自習時間に本部前に出て遊んでみた者がある、誰だかよく取調べて見よ」と言ったが、それは壕一つを距てた自宅から時折双眼鏡で学校の状況を視ていたからであった²⁵。

1882年9月には閑院宮の補佐官としてフランスへ差遣され、途中からフランス公使館付武官を勤めつつ、フランス語とフランス軍政・軍事教育の研究に励んだ²⁶。フランス滞在中にもかかわらず、中佐に任じられ、「意外之御沙汰」と受け取りつつ、素直に感激している²⁷。

帰国してみると、陸軍大学校教官にはドイツ人のクレメンス・メッケルが、士官学校にはフランス人のアンリ・ベルトーが招聘された結果、二者を推す派閥間で対立が激化していた。しかし、村

木雅美によると、寺内はこれを遺憾として、融和を図るため奔走したという²⁸。

○士官学校長時代

1887年6月、寺内は士官学校長心得となり、11月には正式に士官学校長となった。寺内は練兵場のあちらこちらに雑草が生えているのを見るとたちまち不快の色を浮かべて、職員を呼んで「練兵場裡に雑草を見るのは恰も門前に蜘蛛の巣を見るやうなものであつて本校の耻辱之より大なるものは無い」と言って、直ちにこれを抜き取らせたという²⁹。

士官学校長の寺内は他の教官より早く帰宅するようなことはせず、必ず午後4時から6時までは講堂その他の教室等をくまなく見まわってから帰宅するのが常であった³⁰。

また、寺内は区隊長には区隊(2-30名)の氏名を1週間以内に、中隊長には中隊(2-300名)の氏名を1ヵ月に記憶させ、答えられなければその不心得を叱責したというが、そうするだけ寺内自身はいつのまにか全員の氏名を記憶していたという³¹。

1891年6月には第1師団参謀長となるが、このときも部下であった長岡によると、出勤・退営時間は5分と違ったことはなかったという³²。

○日清戦争・戦後期

寺内は1892年9月に参謀本部第1局長となり、1894年6月、日清戦争に備えて参謀本部内に大本営が設置されると、大本営運輸通信長官として鉄道・船舶・電信・郵便の4業務を監督した。

1894年9月、大本営が広島城内の第5師団司令部に移され、寺内も広島へ移動した。寺内は広島大本営で運輸通信長官の職をつとめた。翌1895年5月、三国干渉の結果、閣議で遼東半島返還を決定したことを聞くと、寺内も5月2日夜、川上操六や寺内ら大総督府(戦争最末期に進発していた)幹部は、誰も声を発せず、涙眼で顔を見合わせたという³³。

1895年6月、寺内は参謀本部第1局長事務取扱を、さらに1896年2月、児玉源太郎陸軍次官兼軍務局長が病気引きこもりのため、寺内が軍務局長事務取扱を命じられた。寺内も、行きがかり上致し方ないので、引き受けざるをえなかった³⁴。

この頃のことであろうか、寺内は児玉に鍛えられて書類の閲覧が早くなったという。つまり、時間がなくて閲覧せずに決裁したときに限って児玉から質問され、答えられないと詰責されたのを腹立たしく覚えて、書類を急速に読むよう工夫するようになったという³⁵。

1896-97年に再びヨーロッパ出張を行ったのちの1898年1月、寺内は教育総監に就任する。桂太郎が真鍋斌に送った書簡にあるように、寺内の厳正さが期待されたのであろう³⁶。実際、寺内は陸軍士官学校における士官候補生の喫煙を全面禁止したが、本人も他人に禁煙を命じながら己のみ平然と喫煙するのも心苦しいとして、あれほどの愛煙家でありながら、教育総監時代には絶対煙草を手にしなかったという³⁷。

○参謀本部次長時代

1900年4月、寺内は参謀本部次長となる。同年6月、義和団の勢力が北京に及ぶと、ときの第2次山県内閣は閣議で清への陸軍派遣を決定した。そして、寺内も7月に山県首相から天津で連合軍との協議を命じられて、実行した。帰国後の寺内は1901年2月-1902年5月、陸軍大学校長事務取扱となる。

○陸軍大臣時代（桂内閣期）

1902年3月、寺内は児玉の後任の陸軍大臣となった。寺内は1902年3月-1911年8月までの9年5カ月の間陸軍大臣をつとめ、いわば「寺内体制」を確立した³⁸。

陸軍大臣時代の寺内は、高級副官をつとめていた本郷房太郎によると、精力絶倫にしてよく繁務に堪えていた。すなわち、1日のうちに積もる書類の山をいちいち眼を通して捺印し、他に交渉審査を要するものの他は、絶対翌日にまわすものはなかった³⁹。また寺内は、宿直の勤務状態を見るためにときおり夜半ひそかに省内を巡視するとともに、怠慢な者がいれば訓戒したという⁴⁰。

このような職務精励な寺内からすると、新聞記者は不勉強に思われた。陸相就任直後寺内は新聞記者に対して「今の日本の新聞記者にして訳の分つた奴ハ頓とない、是程に分らず屋がヨーモ寄集つたものだ、コンナ奴等に交際した処が何の益もなく却つて害を仕出すから相手にならないのが一番だ、近付なければ害がないから皆も其心で居るがいゝ」と言い放ったという⁴¹。マスコミを目の敵にしたから、マスコミ受けも当然よくない。

このような陸軍大臣期の特に前半期において寺内が直面しなければならなかったのが、ロシアとの対立であった。

もともと、当時の日本政府では、中国東北部である満州についてはほとんど考えず、韓国（大韓帝国）全体を日本の勢力範囲とするという意見が最大公約数であった。むろん、陸軍内では田中義一（参謀本部員）の不可とする朝鮮国境の守勢的防備を考える者が多かった。3月、寺内は松川敏胤（参謀本部第1部長）との雑談中、「外征に当り露兵をして韓国内に一步も踏込ましめ得ざれば満足すべし」と語り、松川から「仮りに露兵をして韓国内に一度足を踏み込ましむるも、これを撃攘し得て御希望に添う如くせば同様可ならん」と尋ねられ、すぐに「然り」と答えたという⁴²。

ところが、同年4月8日、ロシアが満州からの第2期撤兵を遵守しないと、日露関係は緊迫化した。寺内が見るところ、日露の海軍力ではロシアがやや優勢で、日本陸軍を韓国北西部に上陸させることは難事であり、また陸においてロシアは韓国の東西北から包囲する勢いを示しており、海に強力な艦隊を集めて韓国の南西岸および渤海湾を扼するときは、ほとんど手出しに窮する形勢に立ち至るといふのが寺内の情勢判断であった⁴³。

さて、日露交渉が膠着すると、輿論は強硬で、対露戦争を煽るところがあった。しかし、寺内は冷静であった。当時の新聞談話で寺内は、「何も騒ぐことはない。ソ一戦さが容易く出来るものではない。昔の一騎打の武者絵を見て居るから、戦さは面白く容易く出来るものの様に心得て居るが、今は仲々ソ一は行かぬ。兵を動かすといふことは^{おおごと}大事である。」とたしなめたという⁴⁴。

日本政府内部では、韓国へ限定出兵しつつ日露交渉を満韓交換という落としどころで打ち切ることを主張する元老側（特に山県有朋）と、海軍の作戦を優先して韓国への限定出兵に反対しつつ従来の日本に有利な案で日露交渉を継続しようとする内閣側との対立が続いた。

もちろん、寺内も内閣の一員として、桂首相・小村外相・山本海相に同調した。12月16日の元老会議においても、海外派兵には制海権を把握する必要があるとの山本の主張に大山巖（参謀総長）も賛同し、寺内正毅陸相や児玉源太郎（参謀本部次長）も無言を守ったため、山県は元老会議を途中で退席した。すなわち、2個師団派遣という山県の提議は、対露交渉問題と同様に賛同を得られなかったのである⁴⁵。

それでも1-2個師団の動員発令に固執する山県と、あくまで反対する山本海相との板挟みに苦慮して、寺内は1-2個師団分であれば、いつ動員発令になっても大丈夫なまで準備を整え、動員発令

後 8 日目からは先遣部隊の出発可能にするよう参謀本部で計画を立てていると、山県に弁解している⁴⁶。

結局、2 月 3 日付の芝罘領事からの電報で、旅順艦隊が 1 艦を除いて出港したとの情報が入り⁴⁷、ロシアは戦闘行為に突入したと判断、日本側はロシアとの開戦を決意した。

○日露戦時の寺内

日露戦争中の寺内は出征せず、内地で軍政を行う自分を「御留守番」と形容している⁴⁸。

日露開戦となって、大本営の進転をめぐって、あくまでも日清戦争期の大本営移転のような国内行啓を想定していた寺内と、大陸への移転を考えていた児玉との間で意見の食い違いが起こり、陸軍省と参謀本部との主導権争いにまで発展した。結局、明治天皇が仲裁に入る形で、大総督の権限を弱めた「高等司令部」を編成することで決着した。それが、満州軍総司令部であった⁴⁹。

第 2 軍は 5 月 4 日上陸を開始したが、無事上陸し得たか最も痛心した寺内は、宿直当番であった陸相秘書官に、どんなに深夜におよんでもさしつかえないので、電報が来たらすぐに届けてくれと言い残して官邸に帰った。しかし、その秘書官がうっかり寝てしまったところ、寺内からは「馬鹿ツ貴様は何を寝惚けてゐるか、行つて見ろ確に電報は来てゐるから」と怒鳴られ、散々叱責されたという⁵⁰。また、旅順攻囲戦に関しても、寺内は第 1 回総攻撃で 1 万人に達する死傷者数を聞いて、攻撃の形況を心配している⁵¹。

このように戦況を心配しながら、寺内は裏方として尽瘁した。参謀次長として、満州軍総参謀長の児玉源太郎と寺内陸相との間で苦労した長岡外史によると、寺内のおかげで軍需品に対する費用が大いに節減されたという⁵²。また、砲弾の供給状況を心配する山県へ、寺内はこまめに報告している⁵³。さらに、大岡育造は、寺内が軍隊の糧食問題で、もっぱら地方長官に命じて内地米を購入させることで、正貨の海外流出を防止するとともに、内地米価を調節する方策をとったことを賞揚する⁵⁴。寺内の細かさが発揮されたのである。

また、寺内は、入院中の将校の姓名を答えられなかった医務局員や東京衛戍病院長に対して、「尊き天子の赤子、国家の干城の生命」を預かっている者として申し訳ないじゃないかと説教したという⁵⁵。

ポーツマス講和条約締結で、日露戦争は終わった。ただし、日露戦争が終わっても政府には困難な事情のみ多く、特に財政上の始末は一層の難渋で、寺内も苦慮していた⁵⁶。

また、ポーツマス条約でロシアからの承認を得た日本は、韓国の保護国化にふみきる。1905 年 11 月に締結された第 2 次日韓協約にもとづいて設置された韓国統監には、文官である伊藤が就任することで決着した。ただし、統監の韓国駐劄軍司令官への指揮権を規定した統監府及理事庁官制第 4 条は実行困難だとして、井口省吾が改正を策するが、寺内は井口へ「君は陛下之命に依り枢密顧問の御諮詢を経たる命令を其儘実行出来ずとて改正を総長より申出得るものと信するや」と尋ねたように、さすがに寺内は井口のような「変態之解釈」は無用と思っていた⁵⁷。

○寺内の人となり

既に部分的に触れ、また時間的に先回りすることになってしまうが、この辺でいったん、寺内の人となりや嗜好をまとめておこう。

厳格さ

まず、寺内没後、皆が一様に寺内について想起するのが、寺内の厳格さである。

上原勇作が弁護するところでは、世間では寺内を「厳格過度の人」「依怙の人」と批難する者もいた⁵⁸。そして、木越安綱が見るところでは、寺内が「厳しい人」「毛嫌をする人」という定評があったのは寺内が正直だったからで、元来交際上手で八方美人である桂太郎や川上操六といった人物でなければつとまらない総理大臣を寺内が2年も続けたのは、さぞや苦痛であったろうと推察する⁵⁹。このような正直さに裏打ちされた厳格さは幼少のときからのことで、幼馴染の檜垣直右によると、友人間に忠告しなければならぬときには、面を冒して忠告するのを躊躇したことがないという⁶⁰。

また、秋山雅之介によると、寺内は初対面の人にも小言を言い、また厳として呵責したのは真情の発露で、その人のことを思った慈愛親切からだという⁶¹。

寺内内閣の組織した外交調査会に参加するまではどちらかという寺内と政敵のような関係にあった犬養毅も、寺内が正直かつ恪勤であったことを認めている。寺内が陸軍大臣として一派の者を引き入れたという批難はあったが、寺内が陸軍にとって功労者であることは事実であり、かつ寺内が首相として行ったことに種々過失があったが、それも根が正直な寺内が人を過信したためだといふのである⁶²。同じく、寺内内閣期には政敵の立場に立っていた江木翼も、寺内は公人私人の別を厳重に維持したうえで、公人としては謹厳な反面、私人としては親切な人だったという⁶³。

職務への精励

厳格であること、特に公私に厳格であることは、職務への精励へとつながる。例えば、朝鮮総督時代、定例の長官会議では、精励な寺内が定刻前から議場に出席して、各長官が来るのを待ち構えたりすることもあったという⁶⁴。

また、旅行する際、特別列車を出す関係上、鉄道局が時間表を組み立てて2案を出す、寺内は必ず朝早い方の案を採用した。そのため、昼の短い冬などは、随員・見送り人が朝食もとらず、星をいただきながら停車場へ駆けつけることもしばしばだったという⁶⁵。

事務能力の高さ

厳格さと職務への精励を支えていたのが事務能力の高さであり、逆に厳格さと職務への精励が事務能力の高さを可能にした。

大島健一と須永武義は期せずして、寺内を「創設的の人」「創立的の人」というよりもむしろ「整理的の人」と評している点で一致している⁶⁶。

寺内は、ときに判任官の書いた復命書まで精読して、ところどころ欄外に青赤の鉛筆で注意すべき点を記したという⁶⁷。山のように積み重なった書類も瞬く間に閲覧して、かつその内容に精通していた。よって、既に数年間使われた者でも、1日1-2回の大喝をくらわぬ日はないという⁶⁸。

寺内は遅くとも士官学校長以来、部下が作成した草案には必ず青鉛筆による訂正を加えた。その真意は、「必ずしも其草案が悉く意に充たぬといふ次第じゃアない、或時には感ずべき出来栄のものもあつたが、私としては猶此上の慾望からして君等をして今少しでも向上さしてやりたいと思ふの余り殊更に青鉛筆を以て訂正を加へてあるのじやから、決して気を落さずに勉強せにやアいかぬ」と諭したという⁶⁹。

そのうえで、寺内は抜群の記憶力を誇った。朝鮮総督在職中になると、しばしば「どうも此の頃

は記憶が悪くなつた」と言つて残念がったというが、それでも抜群の記憶力であつた。例えば、地方巡視中、会寧街道の一寒村で路傍に整列していた者の中で、誰も見覚えのない一朝鮮人の前に立ち止まり、「君は何処かで遭ふたことがあるな」と言つたという⁷⁰。

細かさ・用意周到さ

厳格かつ職務精励で、事務処理能力が高い寺内は、一言でいうと、とても細かい人であつた。木越安綱によると、寺内は元来細かいことにまで気をつく人であつて、そのため気の置けない仲の児玉源太郎との間では、児玉も寺内本人も寺内が重箱の隅を突くようだと言つていたという⁷¹。

それは罫紙の使い方にも表れ、部下が書いた書類で文字が罫の外にはみ出していれずすぐに、「此の罫紙の罫は何の爲めに引いてあるのか、之は此の罫の内に纏めて文字を書く為である、それを矢鱈に隣りの領分に迄文字を出すやうな不埒なことでは仕方がない」と小言を言つたという⁷²。

朝鮮総督時代、官邸の寺内の書齋は燃えるような真紅の毛氈が引き詰められていて、少しの塵も殊の外目立つため、汚れていることを嫌つた⁷³。さらに、李王が行啓するとして、寺内は軍服に勲章を着けて、食堂で何かとボーイに指図をしたが、菓子鉢に盛られた菓子を見て「何故此の菓子の上に布を掛けて置かないのか」とつぶやいたという⁷⁴。

この細かさは家庭においても例外でなく、夫人の襖の開閉から立ち居振る舞いまでおよび、いささかでもふつつかなことがあればたちまち懇ろに訓戒したという⁷⁵。

またあえて逆に意表を突くということもした。朝鮮総督時代、ある慈恵病院を巡視する際、寺内は予定した巡視の道順の逆をずんずん行つたため、院内一同を狼狽させた。軍医の佐藤恒丸が推測するところでは、院長に不意に出ることで病院の真相を視察するためであつたという⁷⁶。

以上見てきたような細かさ・用意周到さは、悪くいうと「やかましき」となる。例えば、真冬に来た客人に対しちょうどよい温度にするために、暖炉を焚くのと消すのを再三再四命じるなど、「やかましい人」であつた⁷⁷。

優しさ

児玉如忠によると、寺内は気にくわぬことがあると腹のうちに秘めておくことができない性格のため、よく人を叱りとばしたが、その後ではあたかも夕立が過ぎ去つたように心中一点の曇りも残さず、余りに叱りすぎたときはかえつて「余り叱り過ぎはしなかつたかなァ」などと心を痛めたという⁷⁸。

過去に素行の悪さのため士官学校を放逐された者も、行く末を心配して職をあてがったりする。その典型が、寺内の伝記を編纂した黒田甲子郎本人である。1912年7月に朝鮮総督府嘱託となつたが、これは体の良い食客のようなものであつたという⁷⁹。黒田は色々な役目を仰せつかる一方で、叱られ役であつた⁸⁰。

部下想いであつて、多忙のなか病院へ見舞に行きあれやこれやと差配をするなど、親切であり（一戸兵衛・向井巖）⁸¹、それも、本人には知らして恩着せがましくするようなことはしないという（山根正次）⁸²。かつて少壮士官のとき副官をつとめた津野一輔の大患を非常に心配したり⁸³、元部下の秋山雅之介が青島民政長官の内命を受けたとき、民政部員人事について親身になって心配したりもした⁸⁴。

たとえ生前は犬猿ただならぬ関係にあつても（例えば、大寺安純）、戦死者・病死者のために石碑

を建立し、遺族を扶助するなどしたという⁸⁵。その中には、不治の病に苦しんで自殺した者も含まれるという⁸⁶。

これら「優しさ」の背景には、寺内の外見的イメージとは違って、寺内が義理人情にもろいところがあったためでもある。寺内は、目先の小さな利益よりも、「人倫の大義」（と大仰なことを言っているが、ようは「義理」）の方が優先されるとした⁸⁷。例えば、桂内閣期に桂を始めとした小宴で、座間の興として講談師が「赤穂義士銘々伝」を講談したところ、赤垣源蔵の兄塩山伊左衛門が弟は放縦無頼に身をもちくずすような者ではないとかばうところで、寺内は涙をもよおしながら「乃公はモウ堪らぬ」と言って、席を立ったという⁸⁸。

○趣味・嗜好

寺内はフランスに3年間滞在したこともあってハイカラであった⁸⁹。

宗教では特に仏教を尊信していた。特に禅に親しみ、積徳の居士・智識と交わって、種々の道話を聞いた⁹⁰。寺内は生前、「世の中は悉く仮」「人間が世に生まれたのも仮だ」「此の世は仮の世だから確り遣らねばならぬ」とよく口にしていたという⁹¹が、これも仏教への尊信の影響なのだろう。

趣味は、寺内本人が語るによると、書画骨董が好きで、第1に刀剣、第2に書画、第3に陶磁器等であったという⁹²。

刀剣については、少佐時代まではフランス式の直刀を愛用して、極端な日本刀排斥家であったが、1890年、大島健一がドイツ留学する際、所持していた名刀を1振り贈られたことから始めて、収集するようになった。寺内本人は、暇あるごとに刀剣を取り出してジッと眺めていれば、百八煩惱自然と失せて心気爽然たる心地がするなどと語っていた⁹³。

書画については書斎に掛け換えていた。本人自身は「本来私は書画も真心より好といふ程ではないが、購ふ時の愉快が忘れられぬところから「やぶれもの」を多く持つてゐるのである、真の好といふのならば、世に名だゝる品を数少く持つ方がよいであろう」と言っていたという。

寺内は揮毫もよくした。細字は右手のみで書いたが、少し大字になれば左手で右手首を握り、両腕で書いた。政務の閑なときは、日曜日の午前9,10時頃から昼食をはさんで、午後3,4時、遅いときは夕方まで、書斎にこもって揮毫した⁹⁴。墨汁は揮毫の前夜から官邸の給仕らが磨きためていたが、それでも墨汁が薄いと寺内の小言が出たという⁹⁵。

絵画の方は寺内自ら描くことは稀であったが、描くときは富士山の形を描いて下に松並樹を添えるのが最も多かった⁹⁶。富士山を好んで描いたのは、人は富士山のごとく清浄潔白でなければならぬと考えたからであった⁹⁷。

和歌については、直属の副官が他へ転出する際にはなむけとして詠んだり、朝鮮と満州とを架橋する大工事である鴨緑江架橋の開通式など、感慨が湧くと詠んだりした⁹⁸。用心深い寺内は十分に練った後でないと示さなかったが、常に歌を口ずさむ暇がなくなると、廁に入ったときに考えるようになった⁹⁹。また、和歌ほどは（特に平仄の面で）自信がなかったが、漢詩も作った¹⁰⁰。

最後に寺内の骨董好きに関していうと、高麗陶器が高騰していたときは李朝焼を多く収集して、「李朝の初期に於ける陶器も亦大に愛翫するに足るのである、世人は徒らに高価なる古高麗のみを愛翫して、李朝焼を顧みやうともしない、そこで私は是を多く集めて市価を昂騰させやう。」と言っていたという¹⁰¹。

○日露戦後の予算問題

今までの寺内は、有能な陸軍官僚という位置づけであったが、陸軍大臣として、特に日露戦後の財政難の状況において、陸軍予算をめぐる折衝するうちに、政治家として徐々に成長することとなった。

日露戦争直後、元老で陸軍長老の山県有朋はロシアの復讐戦に備えて、平時 25 師団（戦時には倍増して 50 師団）を提唱した。それに対して、児玉源太郎（満州軍総参謀長）は、平時 19（戦時 38）個師団、すなわち兵数的にはわずか 2 個師団を増加するだけで、後は指揮の効率を高め、火力を増強し、戦略的機動力を向上させることで補おうとする案を立てた。この時点では山県案に同調して、児玉と対立した¹⁰²。

しかし、児玉が早世し、代わって奥保鞏が参謀総長に就任すると、奥が山県案に同調する一方で、逆に寺内陸相は平時 20 師団を策定して奥参謀総長と協議、結局、平時兵力を 2 段階に分けて、第 1 期で児玉構想を、第 2 期で山県構想を実現することとなった¹⁰³。陸軍大臣と参謀総長との対立が、児玉の死と奥の参謀総長就任によって、所を逆転させたことは興味深い。

結局、陸軍は 1907 年度予算編成において第 1 期軍備充実として 3 師団増設をぶつけ¹⁰⁴、節約を旨とする大蔵省との衝突をまねいた。しかし、これは意図的に過大にしたものであって、寺内桂にいうには、現在各省が各個の動作に出、意思疎通がないため、陸軍省としても他省との駆け引き上、競争的に予算請求を行わざるをえなかったという¹⁰⁵。

寺内からすると、西園寺首相は無作為であって、本人いわく「寺内は決して軽率のこと致間敷候へ共、此儘動かさるときは如何なること相成候哉は難計、否寺内の立場としては無理ならぬことに存申候」という¹⁰⁶。寺内も桂の仲介・調整に依頼せざるをえなかった¹⁰⁷。

しかるに、寺内が大蔵省から取寄せた予算書によると、陸軍省提出の新規計画が一切削減され、各省の臨時費に分配したのは寺内に対する「面当」であって、「善後ノ御見込」（桂による後継内閣引き受けの意か）次第では内閣破壊の方が国家将来の利益とまで認識されたのである¹⁰⁸。

それでも、桂・井上の斡旋で大蔵省と陸軍省が歩み寄り、寺内の方も 2 個師団増設であきらめるとともに、陸軍のやりくりで経費を捻出抛出する妥協案を申し出た¹⁰⁹。寺内がこの妥協案を提案したのは、彼自身の説明によると、「即従来ノ計画実行ノ行掛ヲ捨テ内閣ニ波瀾ヲ生セサル為メ、且ハ財政上ノ困難ヲ避クル為メ、一千万円ヲ陸軍ニ与候。此金額ニテ必要ノ充実ヲ実施シ、其他ハ他日財政ノ都合ヲ見斗ヒ、徐々ニ実行ノ事ニ致度」というものであった¹¹⁰。

さらに、翌 1908 年度予算編成においても、日露戦後恐慌の勃発による歳入不足のため紛糾した。しかし、今回も井上や桂の仲介もあって、陸海軍は軍事費の繰り延べを行うとともに、大蔵省は増税を執行する方向で調整が進められた。西園寺からはこの問題で辞表を出さないよう求められ、寺内も約束している¹¹¹。寺内の方も、最初から本問題をもって内閣を瓦解させるのは国家内外に対する威信にかかわり、将来の対議会策としても不得策と考えており、途中行き違いもあって寺内は辞表を提出したが、主担当者以外は留任を望む天皇の意向と首相の懇請もあって、寺内は辞表を取り下げた¹¹²。このように寺内は、内閣の一員として自制的に行動したことがわかる。

○寺内正毅と韓国併合

1908 年 7 月成立の第 2 次桂内閣においても、寺内は陸相に留任した。

さて、寺内正毅と言って、避けて通ることのできない話題が、韓国併合問題である。

日本の韓国併合については、従来、韓国統監の伊藤が併合に積極的であったか否かで解釈に違いがあったが、いわゆる「武断派」(軍部)の寺内が併合に積極的であったとする点で変わりはない。

もちろん、寺内が韓国併合に積極的だとしても、同時代の国際情勢がそれを許すかという問題と密接に関係していた。例えば、韓国皇帝高宗がオランダのハーグで開かれていた万国平和会議に密使を送った事件(1907年のハーグ密使事件)において、これを好機として日本が韓国併合を断行することも考えられたが、このときロシアが日本による韓国併合を承認しなかったため、日本国政府の多数意見は即時併合に消極的であった。寺内も皇帝の廃立を主張したが、現時点での韓国皇帝の日本皇帝への譲位は否としていた¹¹³。

それが、1909年7月になると、桂内閣も「適當の時機」に韓国併合を断行する方針を固めるとともに、前月に辞任した伊藤の後任に、本国政府の意向に忠実であると思われた副統監の曾禰荒助を昇任させた。桂からすると、併合の時機を早くするにはかえって有力者を必要とせず、朝鮮政府の何らかの失策を奇貨として併合を断行する考えであり、寺内も同意見であった¹¹⁴。

しかし、曾禰統監ないし李完用内閣と一進会の間で激しい対立が生じ、その結果、桂ら東京の日本政府からすると、当てが外れた。曾禰統監を非難する杉山茂丸の書翰を接手した寺内は、「此の際曾禰君之处置振りにて却て血雨を見る事有之候ては方針に背く而已ならず、将来我か手出し出来難き場合に可至、甚痛心之次第に御坐候」と桂首相へ訴えている¹¹⁵。

また、12月15日、大久保春野(韓国駐劄軍司令官)が電報で、①一進会を攻撃し合邦論を冷評するといった京城における新聞輿論を融和し、一進会に接近させること、②李完用・中枢院議員・小官吏の一進会反対、合邦論攻撃を抑えることといった2策を併用することによって「排日論」を撲滅することを提案してきた。これに対し寺内は、大体経過にまかせるのがよいと考えていた¹¹⁶。

結局、曾禰統監の病気が進行した結果、5月30日、寺内は韓国統監兼任を命じられる¹¹⁷。寺内は、6月下旬-7月上旬に、永田町の首相官邸で併合準備委員会を開催した。委員会では韓国皇帝の称号を「太公」(grand duke)として世襲とし(ちなみに太皇帝と皇帝世嗣をそれぞれ一代限り「太公」「公」とする)、大公家の経費として150万円の歳費を支給する方針が立てられた。これは、寺内が「韓廷の内生活には、余り急激なる変革を加へないことにしたい」と考えたからであった¹¹⁸。

7月23日、寺内は併合準備委員会でねられた併合案を携えて仁川に上陸、漢城の統監官邸に入ったが、実際に併合に関する談判となったのは、3週間近く経った8月16日のことであった。李完用首相は寺内が手交した覚書を一読したあと「国号ハ依然韓国ノ名ヲ存シ皇帝ニハ王ノ尊称ヲ与ヘラレタキコト」を申し入れた。寺内はいったん拒否したが、朝鮮側は、日本側がこの点に関して譲歩しないならば条約締結には応じないと強硬な姿勢に出たので、併合談判が遅延することを恐れる寺内は妥協せざるをえなかった。すなわち、韓国の国号を朝鮮とするとともに、皇帝を「李王殿下」、太皇帝を「太王殿下」、皇太子を「王世子殿下」と称するという2件を、日本政府に稟議することを寺内は約束した¹¹⁹。すなわち、韓国政府の反対に遭った寺内は韓国側の主張に譲歩して、併合条約の締結を優先したのである¹²⁰。

8月22日、寺内と李首相の間で条約書に調印。寺内は同日の日記に「合併問題ハ如此容易ニ調印ヲ了セリ呵々」と記した¹²¹。もちろん、寺内にとって、この韓国併合は誇らしい成果であった。韓国併合に際し「小早川加藤小西も世にあらば/今宵の月を如何に見るらむ」と詠んだのも、有名な話である¹²²。

一方で、寺内からすれば、当時の漢城では、日本人よりもむしろ韓人の方が静穏であるのが意外

であった。また、これまでの調査で日本人官吏が腐敗していることがわかり、これを淘汰するのも一大骨折り仕事であると思われた。すなわち、「全体に於て韓人処分よりは日人之処分か困難と存申候」という。さらに、従来日本人は韓人を侮り、ときにこれを打擲し、すこぶる野卑を働くのみならず、これまで多少財産を有する者も高利貸しがすこぶる多く、新聞もつねづね韓人を動物視し野卑の言詞で嘲弄することが多く、これらは韓人の上下を通じて怒っているという事態を把握する。よって、将来の施政のためには好ましくないと考える寺内は、桂首相までこの際一新の手段を講じたいと意見具申していた¹²³。

実際、韓国併合条約調印後の8月26日に寺内は統監邸に新聞記者を集めて、李王家への蔑視発言や国民を奴隷視する論調が新聞・雑誌に増えていることへ不満を述べた。「韓国民をして世界の他の国と等しき幸福を享受せしめ賜ふ」ことが天皇の気持ちなので、それに従う報道をすべきとクギを刺したのである¹²⁴。

また、朝鮮在住の日本人官吏については、9月上旬までに大体の整理を行い、高等官約80名を罷免したが、帰国のうへの再雇用を桂首相へ依頼している。また、各政社も近日解散させるつもりで、また昨今のところ四民皆満足の様子であると伝えたいので、「此上は充分の圧力と充分行届たる政治が必要」という¹²⁵。

さて、寺内の朝鮮統治と言えば、いわゆる「武断統治」が有名である。それは、もともと寺内が「警察力」に深甚の注意を払う人物だったからであり、例えば日本国内における社会主義者の取り締まりに関して内務省のそれがはなはだ緩慢であることを大いに遺憾としていたことにも表れている。そのような寺内が、朝鮮統治にあたって「警察力」を重視したのも当然であろう¹²⁶。この「警察力」は、朝鮮統治においては、陸軍警察＝憲兵となって現れることになる。

ちなみに、寺内の1日のスケジュールは、だいたい次のようなものであった。朝の5,6時頃から寢床の中で読書などをし、適宜のときに床を離れて手水を使い、後山を一巡してから朝食をとった。それから総督府に出勤しない日は書齋に入るのを常としたが、その時も必ず軍服を着用した。一時間の昼食をはさんで、退庁の時刻となっても書類の閲覧、来客の応接、部下職員の指示等で寸暇もなく、唯一の楽しみは夫人、児玉秀雄夫妻、武官、秘書官、副官らに囲まれた夕食のひとつであった。夜は10時頃より書見に過ごした。寺内自身、「私は3時間半位より以上寝ることは殆んど無い」と言っていたという¹²⁷。

さて、結局寺内は、総理大臣となるまでの6年以上を、朝鮮総督としてすごすことになる。それでは、寺内が朝鮮総督を長年務めたことにはどのような意味があったのだろうか。

寺内自身が朝鮮にアイデンティティーをいだき、政界引退後の晩年を朝鮮で送るつもりであったということもある¹²⁸。ただし、それ以上に大きかったことは、行政権のみならず、立法権や司法権においても絶大な権限を有する植民地総督を長年勤めたことによって、将来の有力な総理大臣候補者となったことの方が大きかったと思われる。

一方、健康面に関して言えば、韓国併合の結果、糖尿病を発したことが重要であろう。軍医の佐藤恒丸によると、寺内は韓国併合直後に糖尿病を発症したが、これは併合前後に過度に脳漿をしぼったのが一因だという。そして、美酒美食で健啖家である寺内にとって、飲食物の節制はこのうえない苦痛だったろうと佐藤は推測する。最初のうちはコックへ種々苦情を言ったりしたが、そのうち終日断食して肉汁のみを飲んだこともあったという。このような節制食に対して、寺内は「我輩は近頃、一度でも甘いと思ふて食事をしたことはない、只食はねばならぬから食ふまでのことだ」

と言ったという¹²⁹。そのようなこともあって、一時的に糖分が下がったこともあったようだが¹³⁰、下剤を服用するような無理なダイエットをして、石黒忠恵からはひどく怒られたりもした。

○辛亥革命と第3次日露協商

1911年8月、第2次桂内閣が総辞職して第2次西園寺内閣に交代する際、寺内は陸軍大臣兼朝鮮総督の両職とも辞めるつもりであったが、結局、前者のみの辞職となった。

さて、その直後の1911年10月、隣国中国で辛亥革命が勃発、さらに翌11月に、外蒙古が中国からの独立を宣言すると、危機感を抱いた日本陸軍首脳部はその関心を中国よりも満州権益の擁護に集中させる¹³¹。寺内も「満洲は如何御処分相成候御意見に御坐候や」と桂に問いかける。なぜならロシアが内外蒙古の独立を隠に扇動していると見るからである。そして、「清国共和論の我人心に影響する所大なる実に可懼ものたる事は、今日我新聞界并に青年輩の処論に鑑み可知次第に御坐候」と、中国における共和制誕生へ危機感を表していた¹³²。

隣国中国の事変も案外に鎮静しながら、政府組織はその緒につかず、列国は形勢傍観中各自私権の腐食に腐心し、昨今は兵乱がところどころ生じているなか、袁世凱の手腕はなかなか伸長しないと見ていた。そして、寺内は「夫ニ就候テモ我政府之決意ハ那辺ニ有之候や。満洲之処分も今以爲何決意之程不被伺、中央ニ於テ借款も甘ク不参、実ニ残念至極ニ被存申候」という。そして、駐露大使の本野一郎が伝えてきたロシア政府の意向（おそらく日露による満蒙分割）を「〔内田康哉〕外務大臣一存ニテ拒絶ニ全シキ返事ヲ被致候様」に聞きつけ、憤慨している¹³³。

結局、辛亥革命は小康化した。ただし、寺内は中国が到底今日のまま無事におさまる見込みが立たず、中国が諸外国へ求めた借款も中国の要求通り成立するとも思われないため、必ずやこの先紛擾を生じるものと見ていた¹³⁴。

○乃木希典の自刃

1912年9月13日、明治天皇の大喪の日に乃木希典が妻静子とともに自刃するという、寺内にとって衝撃的な事件が起きる。

寺内は乃木と交誼を篤くしており、日露戦後には明治天皇に乃木を元帥府に列せられることを奏上したほどであった¹³⁵。また、1911年5月のイギリス皇帝の戴冠式に陸軍側代表者として誰を派遣するかに関して、大山巖が推薦しなかったため、寺内は乃木から事前の内諾を得たうえで、山県へ推薦したこともあった¹³⁶。

自刃する前日の大正元年9月12日、乃木は寺内を訪ねてひさしく閑談した。その翌朝、乃木は使いの者をして、次の1首を寺内に送った。

思ふことかたりつくして帰る夜の空にも月はまとかなりけり
のち、これが永訣の歌であったことを知った寺内は、茫然としてしばしは何の言葉もなく、ただこの歌を見つめたという¹³⁷。

さて、寺内は乃木自刃後の後始末に奔走する。乃木の兄弟姉妹には貧困者がいることをふまえたうえで、下賜金の額を決定¹³⁸、乃木の遺言書の公表というデリケートな問題にも対処した¹³⁹。

○2 個師団増設問題

西園寺内閣は行財政整理を進めていたが、これより整理一条となったらどのような趨勢を生むの

か、寺内は懸念していた¹⁴⁰。そして、寺内はまず政府に朝鮮への2個師団設置を持ち出し、それが不採用の場合には内部充実のことに取り運ぶのがよいと考えていた。寺内は西園寺内閣が来る議会まで継続すると予想していたので、のち2個師団増設問題で西園寺内閣が倒壊するとは夢にも想っていなかった¹⁴¹。

一方、寺内は西園寺内閣における外交が消極的であることに不満であった。1912年9月、関東州・満鉄の租借期限の延長を中国新政府の承認条件とすることを求める本野一郎（駐露大使）の書翰¹⁴²を桂から知らされた寺内も、ロシア・モンゴル間の動き¹⁴³を警戒しつつ、対抗措置を求めた。しかし、現今の政事はとかく我が国是将来の遂行を忘れ、国民こぞって臆病退避の風に襲われ、その極ついに無気無力、いわゆる不振の情態に陥らなければ幸いであると思われた¹⁴⁴。

そのようななか、2個師団増設問題をめぐって、陸軍は西園寺内閣と鋭く対立する。軍務局長の田中義一は、1912年10月頃から、2個師団増設と積極的大陸政策の実現のため、寺内内閣の樹立と大隈重信・立憲国民党の与党化という計画を立て奔走する¹⁴⁵。

結局、2個師団増設問題によって、西園寺内閣は倒壊した。寺内はもしも西園寺内閣・政友会側の要求に屈したら、陸軍を破壊するのみならず、許すべからざる国家の大害を醸しただろうという。なぜなら、第2次西園寺内閣以来、政友会員は海軍軍人・薩派・造船関係商人らと結託、国体を見捨てたおそろべき悪だくみであって、真に戦慄すべきことという¹⁴⁶。

ただし、寺内いわく、別段痛くない腹を探られ、おおいに閉口した¹⁴⁷こともあってか、寺内は沈黙を守る¹⁴⁸。このことは逆に、寺内が総理大臣になることを強烈に意識しだしたことを意味しているよう。

西園寺内閣倒壊後、成立した第3次桂内閣は、西園寺内閣倒壊の原因をつくったとして、逆風にみまわれた。結局、桂内閣も1913年2月に倒壊するが、寺内はその騒擾の裏面に、政客の一部もしくは辛亥革命に関係した日本人・中国人が、アメリカや日本内地の社会主義者および政治上の野心ある論客と悪計を交えたと推測する。そして、万一軍隊の一部がこれに加担するようなことがあれば実にゆゆしき大事で、国家のため憂慮に堪えないという¹⁴⁹。しかしながら、このような裏面の事情を覚らず、桂をはじめ元老諸公は廟堂で迂遠な議論をしたと見るほかないのである¹⁵⁰。

寺内はこのような「毒」が軍隊に入らぬよう予防処置をとることが最も必要と考えた。現在のよるような政局が持続するときは、満州方面における日本の勢力削減は言うまでもなく、朝鮮人間の野心包蔵者が共和とか独立とか口走るようになり、将来の統括上憂慮すべきと寺内には思われた¹⁵¹。

○山本内閣に対して

山本権兵衛内閣は政友会の主張に押されて、軍部大臣現役武官制の改正に着手するが、内閣の一員として態度曖昧な木越安綱陸相を岡市之助（陸軍次官）は強く批判、次官辞職を寺内まで相談してきた¹⁵²。しかし、寺内は、大正政変に続いてふたたび陸軍部内に破綻を生じ、世上の非難も高まるのを憂いて、「此場合陸軍省ハ問題ヲ絶対ニ拒マス、体能ク形ヲ拵サヘ、或意思ノ言明ハ別トシテ、謂ハユル柔能ク剛ヲ制スルノ意ヲ以テ後ノ増師問題ヲ都合能ク片付クルノ工夫ヲ凝サレテハ如何哉ト思フ」と、岡には辞職を思いとどまるよう電報を打っている¹⁵³。寺内も陸軍大臣や朝鮮総督を長く務めるなか、柔軟な政治手法を獲得するようになったことが印象的である。

もちろん、寺内は、山本内閣の行政整理の結果、当路有志が数十年間国家のため経営してきた国務機関を一朝にして無造作に打ちこわし、官吏はあたかも「政党者流之使用人」のような感を生じ、

上下こぞって国家の強弱は眼中にない状況をあてこすっている¹⁵⁴。

○第2次大隈内閣に対して

山本内閣はジーマンス事件で倒壊、代わって1914年4月、第2次大隈重信内閣が成立した。外相は加藤高明である。この大隈内閣期の同年7月、第1次世界大戦が勃発する。

第1次世界大戦の勃発に寺内も驚いた。しかし、「是は数十年来之準備事業に可有之、恰も歐洲百年間一大事の起る事預言之通に御坐候が、此上は可成治平に復し度きものと存申候」との感想を抱く¹⁵⁵。日本も対独参戦し、ドイツの根拠地である中国山東省膠州湾・青島へ出兵することとなった。寺内からすれば、膠州湾のドイツ軍は孤城を死守する者たちなので、日本軍が国威を失墜しないような処置を岡市之助陸相に求めた。具体的には、独立師団に種々の小部隊を属させてかえって1個師団よりも多いという「奇観」を避け、正々堂々と1軍を編制することであった¹⁵⁶。

大隈内閣は、2個師団増設費が否決されたことを受けて衆議院を解散するが、寺内は陸相がそれを拒む理由はないと考え、その旨を東京の陸軍省へ打電した。陸相が閣員と袂を分かつのは、議会と政府が妥協して国防問題を撤回し、他の予算を通過させる場合に限るのである¹⁵⁷。

一方で、寺内は現在の政界の情勢を憂慮しており、この党派根性の悪習慣は行くところまで行かなければ解決は難しいと感じていた。彼らが思うまま党派性を発揮し、その極ついに国民の先覚者が憤起しなければ「大療治」はできない¹⁵⁸。そういう意味で、寺内にとって与党立憲同志会と野党立憲政友会の対立は蝸牛頭上の争いでしかない¹⁵⁹。しかし、陸軍にとって最悪なのは政友会が多数を獲得、立憲国民党と提携して2個師団増設に反対するときで、そのときは時局がはなはだ困難となるであろう。よって、陸軍は終始不偏不党の態度で、万一反対党多数ともなれば今一度衆議院解散を実行させたいと寺内は考えていた。その間、我が陸軍はあまり政治運動に関係せず、国民に向かって軍備の必要を明白に鼓吹することに努めるべきなのである¹⁶⁰。

結局、総選挙で政府与党が勝利、2個師団が実現すると、寺内も岡陸相へ感謝を述べている¹⁶¹。

○対華21カ条要求に対して

さて、第1次世界大戦が勃発して、西欧列強がアジアを顧みる余裕を失ったために、日本にとって西欧列強の外圧が著しく弱まるという、未だかつてない事態が生じた。そして、このことは、アジア・モンロー主義の国策レベルでの登場を可能にする¹⁶²。

寺内は1914年8月、停車場で日置益（駐中公使）に会った際、ヨーロッパの動乱は少くも6ヶ月は継続するので、その場合満州の治安は日本が代って任じ、満州兵の要部は中国本部に移すことで、「亜細亜モンロー主義」を実行するよう求めた。なぜなら、今日の戦争は人種戦争であり、これをアジア人から見ればキリスト教国人对異教国民との戦争なので、「或る点迄は亜細亜は亜人の支配に可置ものたることを、欧州人に知らしむる」のも一見識と思えたからである¹⁶³。

もちろん、アジア・モンロー主義といっても、日本と中国は対等でない。寺内は、「袁ヲシテ目下ノ欧亜ノ大勢ヲ了知セシメ、我指導ノ下ニ相一致シ欧人ノ跋扈ヲ制シ、進テ我地歩ヲ確立スルコト第一策ナルヘシ。其窮極スル所、亜細亜ノ天下ハ我皇ノ統裁ノ下ニ置クニアルヘシ」という¹⁶⁴。

さて、1914年12月に対華21カ条要求をめぐる交渉が始まった。寺内からすれば、元来今回の提案は青島攻撃の当初に計画したもので、青島攻略が片付き、凱旋撤兵の前に中国へ持ち出してこそ処置の方法もつくのに、撤兵の後に難題を持ち込んだら中国人にも腑に落ちないのは当然と思わ

れた¹⁶⁵。つまり、明石・田中・上原派ら陸軍中堅層は要求内容が不十分であり、交渉方法が十分強硬でなく、譲歩的であったと批判したのに対して、陸軍長老である寺内と山県は要求内容が過大であり、交渉方法が懐柔的または互議的でなかったとして批判したのであった¹⁶⁶。

寺内は、長春や奉天では日本製の帽子を池に捨てたり踏みにじったりする光景に出くわしたという西原亀三からの報告を聞いて、「とり返しのつかんことをやってしまった」と嘆き、「この調子で進んだら、日本と支那はヨーロッパにおけるドイツとフランス以上の、永遠の敵になってしまう」と悲観した。そして、涙を流して、「大隈内閣のやることは一々東洋永遠の平和の打ちこわしだ」と苦言を述べ、「領土を侵略することはたやすいが人の心を奪うことはできない」と嘆いたという¹⁶⁷。

○日露同盟に向けて

山県は第1次世界大戦に入ると日露同盟論を唱えだすが、当初陸軍は必ずしもこれに同調していなかったと推測される。寺内も、1915年のものと推定される電報の中で、「卑見ニ由レハ、日露同盟ハ尚早ナルヘシ」と述べていた¹⁶⁸。

しかし、ロシアが連合国から離脱することは絶対に避けなければならなかった。「将来英との約束は継続するものとしても、露と親交を結び、支那に対する列国の競争に対向するの準備無之では、帝国は立脚の地歩を失ふ」と考える寺内にとって、当時日本がロシアに供給した程度の武器援助では不十分であった。今日のように群小が政権を争い排擠しあう悪風を一洗しなければ、日本はついに島国に蟄居するほかないと、日本の前途を憂慮¹⁶⁹、山県の日露同盟論に同調していく。

1916年1月、ゲオルギー・ミハイロヴィッチ (Georgie Mikhailovich) 大公の来日を日露同盟締結へとつなげたい山県や陸軍に対して、石井菊次郎外相は消極的であった。それに不満な寺内は独断で3週間以内の弾薬20万発発送をロシアへ約束¹⁷⁰するとともに、新日露協約の締結というかなり踏み込んだ発言を行った¹⁷¹。

結局、陸軍側の主張に石井も引きずられ、同年2月に日露間で交渉が始まる。その際、争点の1つが、ロシアの権益である東支鉄道譲渡問題であった。寺内としてはぜひとも日本の汽車がハルビンまで行かないようにしなければ、協商も日本側にとって意味をなさないと考えていた¹⁷²が、陸軍としては鉄道譲渡問題で日露同盟条約を不成立にするつもりはなく¹⁷³、結局、松花江左(南)岸—長春間鉄道の譲渡で日露は妥協、日露同盟条約(第4次日露協商)を締結した¹⁷⁴。

○反袁政策への批判

1915年後半、袁世凱を皇帝とする運動が起きると、大隈内閣は10月、袁に帝制実施延期を勧告した。さらには、1916年3月、袁を完全に打倒する閣議決定までふみこんだ。

1916年3月7日の閣議決定を察知した寺内は、袁打倒が中国の混乱をもたらし、延いては第3国の利益をもたらすだけとの認識を示した¹⁷⁵。

寺内が反袁政策に批判的なのは、山県と同様、日本の国力に対する冷静な判断が存在したからである。寺内からすれば、日本の財力ないし人物の数から言って中国1国を引き受けるだけの力はなく、むしろ中国の領土を保全してこれを経済的に日本に有利に利用する他ないのである。もちろん、満州は別だが、これも今すぐ地図の色を変えたいというわけではないという¹⁷⁶。

そして、この時期、勝田主計・後藤新平・西原亀三・坂西利八郎など大隈内閣の反袁政策に批判的な者が、寺内のもとに結集¹⁷⁷、そして続く寺内内閣の対中政策を担当することになる。

さて、寺内は反袁政策に関して参謀本部に注意を行うが、上原勇作（参謀総長）や田中義一（参謀次長）は強く反発¹⁷⁸、結局、6月の袁急死までとめることはできなかった。

○寺内内閣の成立

1916年10月9日、寺内は満を持して内閣を組織した。ただし寺内は、山県や平田東助が求める立憲同志会・加藤高明との連立内閣を拒否した経緯もあり、また憲政会（10月10日に立憲同志会・中正会・交友倶楽部が合同して成立）がかつて立憲同志会から脱党した後藤新平・仲小路廉の入閣に強く反発して対決姿勢をとったことから、逆に是々非々の立場をとる政友会に接近する。結局、1917年1月、衆議院は解散されるが、寺内は2月10日の地方長官会議の席上で、憲政会を激しく非難した¹⁷⁹（寺内の手元の「特別機密書類」のうち「選挙ニ関スル件」を見ると、選挙の目的は「憲政会ノ全滅ヲ期スル」ことにすべてをかけていた¹⁸⁰）。4月の総選挙の結果、憲政会は惨敗して政友会が第1党となり、寺内内閣も基盤が安定する。

○西原借款

当時の日本は、大戦という絶好の機会をとらえて1914-18年に約22億円の国際収支上の黒字を獲得しており、「円外交」を展開するのに適合的な経済状況になっていた¹⁸¹。よって、寺内内閣は、借款を供給することによって、中国における「親日」政権を育成する方向へと向かう。

この借款供給政策において、外務省による公式外交ルートを通じた非公式外交ルートが形成される。すなわち、従来、中国への政治借款を担った国際借款団たる四国借款団には、日本からは横浜正金銀行が参加し、中国との交渉には駐華公使が担当していたが、西原借款は日本興業銀行・朝鮮銀行・台湾銀行の3銀行で設立した借款団が引き受け、現地交渉は外交官ではない西原が担当することになった。これを「援段政策」という。

しかし、1918年に入ると、現地の林権助公使や、外務省政務局第1課長の小村欣一は疑念を抱くようになり、日本が北方の段祺瑞政権のみに強力な援助を与えることは南方側の深甚なる反感を招くとして、援段政策の危険性を指摘した意見書を提出した。

これに対して寺内は、総論としての南北妥協の必要性には賛成しつつも、林が求めた日中親善の証としての中国駐屯軍の撤退、治外法権の放棄、勢力範囲の撤廃などに対しては強く反発した¹⁸²。結局、ひとたび再検討が要請された援段政策も継続されることとなった。

さらに、5月頃には林公使と西原との間で相互不信が修復不可能なまでに拡大した¹⁸³。林は、5月31日の後藤外相宛て電報で、寺内の系統に属した「朝鮮組」が在華公使館と協議を遂げることなく借款交渉を進めることを激しく非難するに至る¹⁸⁴。

それに対して、寺内首相はあくまでも西原を擁護し、林公使をあからさまに非難する書翰を後藤外相に送付したのである¹⁸⁵。結局、援段政策は、寺内内閣の総辞職まで続いたのである。

○シベリア出兵

持病の糖尿病に加えて職務に精励したため、ついに1918年1月27日になって倒れた¹⁸⁶。4月にも「病軀劇労に任へざる」と山県に辞意を洩らしたが、山県からは「一身既に君国に捧ぐ斃れて後已むべきのみ」と諭されて、翻意せざるをえなかった¹⁸⁷。

その寺内の心労のうち最大のものが、シベリア出兵問題であった。

イギリスとフランスは東部戦線再建のため、日本およびアメリカの出兵を求める一方、アメリカは一貫して日本の出兵に警戒的であった。このようななか、本野外相は英仏との協調を重視して出兵を積極的に唱えることになり、2月5日には独断でアメリカ大使にシベリア鉄道とアムール鉄道との分岐点までの日本軍占領を提案するにいたった。

しかし、この本野が寺内の了解なしに提案したことから、本野と寺内の関係は極度に悪化する。寺内や後藤新平内相からすれば、あくまで日本の自主出兵でなければならなかった¹⁸⁸。

すなわち、寺内首相からすれば、①対米英関係の調整、②日中共同作戦基盤の形成、③用兵計画の確立、といった問題が解決されない限り、シベリア出兵は時期尚早なのである¹⁸⁹。特にアメリカとの関係調整の必要性については、アメリカで戦費を調達しなければならない以上、アメリカの反対を押し切って出兵政策を断行するのは困難と考えられた¹⁹⁰。

しかし、7月になって、肝心のアメリカがチェコ軍救援のためウラジオストックへの日米共同出兵を提議するに至った。これを受けて7-8月に何度も開かれた臨時外交調査委員会では、原敬・牧野伸顕といった対米協調論者の求める「限定出兵」説と、寺内首相ならびに三角同盟（後藤・伊東・犬養毅）といった自主出兵論者の求める「全面出兵」説とが対立した。前者の「限定出兵」とは、アメリカのいう通り兵員＝7000名（のち1万2000名に出兵数を増加させた）、作戦地域＝ウラジオストックとその周辺に限るというもので、それに対して後者の「全面出兵」とは作戦範囲をバイカル湖以東の東シベリア・北満全域にまで拡大し、兵数も増加するというものであった。最終的に伊東起草の玉虫色的な妥協案によって対立は回避され、シベリア出兵に決定する。

しかし、いったん出兵が開始されると、軍事行動は自己回転を始め、出兵数は次第に膨大化して行き、約7万3400名にまで膨れ上がる。そして、このことは日米合意を破るものとしてアメリカの対日不信感を一層助長することになるのである。

○寺内の死

第1次世界大戦期には物価が上昇傾向にあるところ、シベリア出兵を見込んだ米の思惑買いもあって米価が急騰、米騒動を引き起こす。もともと病気で辞意を洩らしていた寺内は、最終的に内閣を総辞職させることを決断した。9月21日、寺内は辞表を提出する。

1919年4月には大磯の別邸が竣工、静養に入った¹⁹¹。しかし、寺内には時間が残されていなかった。同年10月下旬、寺内は仮死状態からいったん息を吹き返したが、その際、長男寿一や次男毅雄ないし軍医たちが公務や職務をよそに詰めかけているのを「筋道が違ふ」と繰り返したという。最後の最後まで、寺内らしいやりとりであった¹⁹²。

〔謝辞〕

本研究は、2017年度「公益財団法人JFE21世紀財団」の研究助成（「未刊行史料にもとづく日本の韓国併合・朝鮮統治の研究」）による研究成果の一部である。

¹ 徳富猪一郎編『公爵山県有朋伝』上中下（山県有朋公記念事業会、1933年）。徳富猪一郎編『公爵桂太郎伝』（故桂公爵記念事業会、1917年）。

² 黒田甲子郎編『元帥寺内伯爵伝』（元帥寺内伯爵伝記編纂所、1920年）。

³ 以下、桜園寺内文庫に関しては、伊藤幸司氏による一連の研究（伊藤幸司「桜園寺内文庫の変遷と現

状」伊藤幸司編『寺内正毅ゆかりの図書館桜圃寺内文庫の研究—文庫解題・資料目録・朝鮮古文書解題—』（勉誠出版、2013年）、伊藤幸司「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」伊藤幸司・永島広紀・日比野利信編『寺内正毅と帝国日本 桜圃寺内文庫が語る新たな歴史像』（勉誠出版、2015年）を参照。

- 4 『防長新聞』1922年2月5日。伊藤幸司「桜圃寺内文庫の変遷と現状」27頁から再引用。
- 5 井上鍵之助編『佐藤先生山陰旅行随行記』（神徳書院、1925年）。伊藤幸司「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」11頁から再引用。同伊藤論文12-13頁によると、乃木書翰および歌は、山口県立大学の「寺内正毅関係資料」軸巻之部14に原本が確認されるという。
- 6 伊藤幸司「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」9頁。
- 7 伊藤幸司「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」6頁。
- 8 伊藤幸司「桜圃寺内文庫と寺内正毅関係資料」9-10頁。
- 9 伊藤幸司「桜圃寺内文庫の変遷と現状」47-48頁。
- 10 拙稿「寺内正毅宛有朋書簡について」（『学習院大学史料館紀要』21号、2015年）。
- 11 拙稿「寺内正毅宛乃木希典書簡（大正元年9月12日付）」『学習院大学史料館ミュージアム・レター』第26号（2014年）。
- 12 長佐古美奈子「寺内正毅・寿一新収資料について 一皇室下賜工芸品の来歴調査」『学習院大学史料館紀要』20号（2014年）。
- 13 北岡伸一『日本陸軍と大陸政策 1906—1918年』（東京大学出版会、1978年）。
- 14 早稲田大学大学史資料センター編『大隈重信関係文書』全11巻（みすず書房、2004-15年）。
- 15 前掲、北岡『日本陸軍と大陸政策』。菅野直樹「朝鮮・満州方面からみた寺内正毅像の一断面 一鴨緑江採木公司等との関係を通じて」『東アジア近代史』16号（2013年）。
- 16 「逸話零聞」『寺内伝』92頁。
- 17 堀『寺内正毅と近代陸軍』21-22、30頁。
- 18 堀『寺内正毅と近代陸軍』30-31頁。
- 19 堀『寺内正毅と近代陸軍』31、33頁。
- 20 「逸話零聞」『寺内伝』59-60頁。
- 21 「逸話零聞」『寺内伝』11-15頁。
- 22 堀『寺内正毅と近代陸軍』37-38頁。
- 23 堀『寺内正毅と近代陸軍』38-40頁。
- 24 1916年12月2・13日付石黒忠恵夫妻宛寺内正毅書翰、「石黒忠恵関係文書」798・799。
- 25 「逸話零聞」『寺内伝』77頁。
- 26 「逸話零聞」『寺内伝』45-47頁。
- 27 1884年12月17日付品川弥次郎宛寺内正毅書翰、『品川文書』5巻176-177頁。1894年と年代間違いをしている。
- 28 「逸話零聞」『寺内伝』57-58頁。
- 29 「逸話零聞」『寺内伝』18-19頁。
- 30 「逸話零聞」『寺内伝』34-35頁。
- 31 「逸話零聞」『寺内伝』35-39頁。
- 32 「逸話零聞」『寺内伝』49頁。
- 33 石黒忠恵『懐旧九十年』333頁。大澤『川上操六』167頁。

-
- 34 1896年3月3日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』258頁。
- 35 「逸話零聞」『寺内伝』156-157頁。
- 36 『桂伝』乾巻。堀『寺内正毅と近代陸軍』113頁。
- 37 「逸話零聞」『寺内伝』74-75頁。
- 38 北岡『日本陸軍と大陸政策』62-65頁。
- 39 「逸話零聞」『寺内伝』60-62頁。
- 40 「逸話零聞」『寺内伝』51-52頁。
- 41 「寺内中将の大气焰」『東京朝日新聞』1902年4月2日。堀『寺内正毅と近代陸軍』129頁。
- 42 谷寿夫『機密日露戦史』（原書房、1966年）82頁。
- 43 1903年4月29日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻372-373頁。
- 44 「寺内陸相断片」『読売新聞』1903年10月9日。堀『寺内正毅と近代陸軍』134頁。
- 45 千葉『旧外交の形成』129-130頁。
- 46 1904年1月17日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻376-377頁。
- 47 1904年2月3日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻377-378頁。
- 48 1905年11月14日付大山巖宛寺内正毅書翰、「大山巖関係文書」32—128。
- 49 堀『寺内正毅と近代陸軍』150頁。
- 50 「逸話零聞」『寺内伝』128-130頁。
- 51 1904年8月22日付長岡外史宛寺内正毅書翰、『長岡文書』書簡・書類篇220頁。11月と月の推定を間違っている。
- 52 「逸話零聞」『寺内伝』76頁。
- 53 1904年8月22日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻378頁。
- 54 「逸話零聞」『寺内伝』84-85頁。
- 55 「逸話零聞」『寺内伝』24-25頁。
- 56 1905年11月14日付大山巖宛寺内正毅書翰、「大山巖関係文書」32—128。
- 57 1905年12月27日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻379-380頁。
- 58 「逸話零聞」『寺内伝』1-2頁。
- 59 「逸話零聞」『寺内伝』41-42頁。
- 60 「逸話零聞」『寺内伝』91頁。
- 61 「逸話零聞」『寺内伝』96-97頁。
- 62 「逸話零聞」『寺内伝』105-106頁。
- 63 「逸話零聞」『寺内伝』106-108頁。
- 64 「逸話零聞」『寺内伝』170-171頁。
- 65 「逸話零聞」『寺内伝』135-136頁。
- 66 「逸話零聞」『寺内伝』21-22頁。
- 67 「逸話零聞」『寺内伝』156-157頁。
- 68 「逸話零聞」『寺内伝』155頁。
- 69 「逸話零聞」『寺内伝』32-33頁。
- 70 「逸話零聞」『寺内伝』132-133頁。
- 71 「逸話零聞」『寺内伝』54-55頁。

-
- 72 「逸話零聞」『寺内伝』50 頁。
- 73 「逸話零聞」『寺内伝』117 頁。
- 74 「逸話零聞」『寺内伝』127-128 頁。
- 75 「逸話零聞」『寺内伝』50-51 頁。
- 76 「逸話零聞」『寺内伝』134-135 頁。
- 77 「逸話零聞」『寺内伝』82-84 頁。
- 78 「逸話零聞」『寺内伝』162-164 頁。
- 79 「逸話零聞」『寺内伝』108-114 頁。
- 80 「逸話零聞」『寺内伝』116-118 頁。
- 81 「逸話零聞」『寺内伝』4-8 頁。
- 82 「逸話零聞」『寺内伝』78-79 頁。
- 83 「逸話零聞」『寺内伝』123-124 頁。
- 84 「逸話零聞」『寺内伝』97-98 頁。
- 85 「逸話零聞」『寺内伝』15-17 頁。
- 86 「逸話零聞」『寺内伝』83-84 頁。
- 87 「逸話零聞」『寺内伝』88-90 頁。
- 88 「逸話零聞」『寺内伝』124-125 頁。
- 89 「逸話零聞」『寺内伝』87-88 頁。
- 90 「逸話零聞」『寺内伝』126 頁。
- 91 「国司少将談 乃木將軍と共に恐がられた寺伯」『防長新聞』1919 年 11 月 6 日。堀『寺内正毅と近代陸軍』20 頁。
- 92 「逸話零聞」『寺内伝』146 頁。
- 93 「逸話零聞」『寺内伝』68-71、146-147 頁。
- 94 「逸話零聞」『寺内伝』136-140 頁。
- 95 「逸話零聞」『寺内伝』140-141 頁。
- 96 「逸話零聞」『寺内伝』141-142 頁。
- 97 「逸話零聞」『寺内伝』53-54 頁。
- 98 「逸話零聞」『寺内伝』160、166-167 頁。
- 99 「逸話零聞」『寺内伝』171-172 頁。
- 100 「逸話零聞」『寺内伝』178-180 頁。
- 101 「逸話零聞」『寺内伝』64 頁。
- 102 黒野耐『帝国国防方針の研究』（総和社、2000 年）110-112 頁。
- 103 『戦史叢書 大本営陸軍部〈1〉』220 頁。『大本営陸軍部〈1〉』220 頁。「明治三十九年十月 極秘 戦後軍備充実計画」、「宮崎周一資料」（防衛省防衛研究所図書館）。『明治天皇紀』11 卷 649-652 頁。黒野 112-113 頁。室山 1218 頁。
- 104 『戦史叢書 大本営陸軍部〈1〉』220 頁。
- 105 1906 年 9 月 29 日付井上馨宛桂太郎書翰、「井上馨関係文書」（国立国会図書館憲政資料室所蔵）336—3。
- 106 1906 年 11 月 10 日付山県有朋宛桂太郎書翰、『山県有朋関係文書』1 卷 348 頁。

-
- 107 1906年11月20日付桂太郎宛寺内正毅書翰、「桂太郎関係文書」62-3、『桂文書』260-261頁。
- 108 1906年11月20日付桂太郎宛寺内正毅書翰、「桂太郎関係文書」62-3、『桂文書』261頁。
- 109 『原敬日記』11月22・29日条。1906年11月30日付山県有朋寺内正毅書翰、『山県文書』2巻384-385頁。
- 110 1906年12月1日付桂太郎宛寺内正毅書翰、「桂太郎関係文書」62-4、『桂文書』261-262頁。
- 111 1907年12月4・6日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』262-263頁。
- 112 1908年1月14日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻385-387頁。
- 113 森山『近代日韓関係史研究』213-214頁。
- 114 森山『近代日韓関係史研究』225-226頁。
- 115 1909年12月8日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』264-265頁。
- 116 1909年12月16日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』265-266頁。
- 117 1910年5月30日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻391頁。
- 118 新城『天皇の韓国併合』32-33、51-52頁。
- 119 新城『天皇の韓国併合』40-41頁。
- 120 1910年8月22日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻391-392頁。
- 121 『寺内日記』1910年8月22日条。
- 122 「逸話零聞」『寺内伝』71-73頁。
- 123 1910年8月22日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻391-392頁。
- 124 「寺内統監の苦言」『東京朝日新聞』1910年8月29日。堀『寺内正毅と近代陸軍』198頁。
- 125 1910年9月10日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』268-269頁。1910年9月10日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻393頁。
- 126 「逸話零聞」『寺内伝』27-28頁。
- 127 「逸話零聞」『寺内伝』153-154頁。
- 128 「逸話零聞」『寺内伝』44-45頁。
- 129 「逸話零聞」『寺内伝』131-132頁。
- 130 1916年4月28日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」796。
- 131 北岡『満州問題と国防方針』93頁。
- 132 1912年1月7日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』275-276頁。
- 133 1912年3月4日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』277頁。
- 134 1912年4月6日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』278-279頁。
- 135 「逸話零聞」『寺内伝』93-94頁。
- 136 1911年2月4日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻394頁。
- 137 「逸話零聞」『寺内伝』94頁。
- 138 1912年9月15日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』282頁。
- 139 1912年9月16日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』282頁。
- 140 1912年5月16日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」797。
- 141 1911年6月2日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻398-399頁。
- 142 1912年9月15日付桂太郎宛本野一郎書翰、「桂文書」88—18。
- 143 この後、1912年11月3日に締結された露蒙協定で、ロシアはモンゴルを圧迫して独立宣言を自治

宣言に格下げさせるとともに、ロシアのモンゴルでの経済権益を承認させた。

¹⁴⁴ 1912年10月17日付桂太郎宛寺内正毅書翰、『桂文書』282-283頁。

¹⁴⁵ 北岡『日本陸軍と大陸政策』128-130頁。

¹⁴⁶ 1912年12月24日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻400-401頁。

¹⁴⁷ 1913年12月13日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」787。

¹⁴⁸ 1912年12月24日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻400-401頁。1912年12月9日付岡市之助宛寺内正毅電報、「岡市之助関係文書」92頁。

¹⁴⁹ 1913年2月12日付岡市之助宛寺内正毅電報、「岡市之助関係文書」93頁。

¹⁵⁰ 1913年2月15日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」788。

¹⁵¹ 1913年2月19日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻401-402頁。

¹⁵² 1913年4月26日付寺内正毅宛岡市之助電報、「岡市之助関係文書」90頁。

¹⁵³ 1913年4月30日付岡市之助宛寺内正毅電報、「岡市之助関係文書」93頁。

¹⁵⁴ 1913年6月20日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻403-404頁。

¹⁵⁵ 1914年8月10日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」792。

¹⁵⁶ 1914年8月22日付明石元二郎宛寺内正毅書翰、「明石元二郎関係文書」32—11。

¹⁵⁷ 寺内正毅電報、「岡市之助関係文書」117-118頁。

¹⁵⁸ 1914年12月10日付明石元二郎宛寺内正毅書翰、「明石元二郎関係文書」32—13。

¹⁵⁹ 1915年1月5日付石黒忠憲宛寺内正毅書翰、「石黒忠憲関係文書」801。

¹⁶⁰ 1915年1月5日付田中義一宛寺内正毅書翰、「田中義一関係文書(書翰の部)」(山口県文書館所蔵)838。1915年1月8日付明石元二郎宛寺内正毅書翰、「明石元二郎関係文書」32—7。

¹⁶¹ 1915年6月10日付岡市之助宛寺内正毅書翰、「岡市之助関係文書」118-119頁。

¹⁶² 小林「世界大戦と大陸政策の変容」1-2、7頁。

¹⁶³ 1914年8月22日付明石元二郎宛寺内正毅書翰、「明石元二郎関係文書」32—11。

¹⁶⁴ 1915(カ)年杉山茂丸宛寺内正毅電報草稿、「寺内文書」421—2。

¹⁶⁵ 1915年1月27日付田中義一宛寺内正毅書翰、「田中義一関係文書(書翰の部)」(山口県文書館所蔵)833。

¹⁶⁶ 北岡『日本陸軍と大陸政策』177頁。

¹⁶⁷ 『夢の七十余年』。堀『寺内正毅と近代陸軍』237頁。

¹⁶⁸ 1915(カ)年杉山茂丸宛寺内正毅電報草稿、「寺内文書」421—2。

¹⁶⁹ 1915年8月9日付明石元二郎宛寺内正毅書翰、「明石元二郎関係文書」33—3。

¹⁷⁰ 1916年2月2日付田中義一宛寺内正毅書翰、「田中義一関係文書(書翰の部)」(山口県文書館所蔵)840。

¹⁷¹ 「日露協約成立事情」、「二上文書」9。

¹⁷² 1916年4月4日付山県有朋宛寺内正毅書翰、『山県文書』2巻407-408頁。

¹⁷³ 1916年付寺内正毅宛田中義一書翰、「寺内文書」315—52。

¹⁷⁴ 『外文』5—1、129-34、136-9、142-3、146-9、152頁。ロシア2月革命後も、日本政府は臨時政府との間で東支鉄道南部支線の譲渡価格をめぐる交渉を進め、結局は日本側の満足する2300万円で決着したが、10月革命の真っ最中のことであり、実効性を喪失した(『外文』5—1、171-82頁。『外文』6—1、117-52頁)。

-
- 175 1916年3月11日付後藤新平宛寺内正毅書翰、「後藤文書」34—135。1916年4月4日付山県有朋宛寺内正毅書翰、「山県文書」第26冊。
- 176 1916年6月9日付牧野伸顯宛吉田茂書翰、『吉田書翰』608-9頁。
- 177 北岡『日本陸軍と大陸政策』192-193頁。
- 178 1916年4月23日付寺内正毅宛上原勇作書翰、「寺内文書」336—31。1916年日付不明(5月上旬カ)寺内正毅宛田中義一書翰、「寺内文書」315—52)。
- 179 『内務省史』4巻395-400頁。
- 180 「寺内正毅関係文書」。金原「第十八代寺内内閣」250-251頁。
- 181 「解題」鈴木武雄監修『西原借款資料研究』(東京大学出版会、1972年、以下『西原借款』と略記)41頁。
- 182 外務省記録「(松本記録) 対外政策並態度関係雜纂 对支那之部 (本野大臣)」(1・1・1・3—2—4)。『寺内内閣』下巻134-6頁。『寺内日記』1918年3月3日条。
- 183 中谷「対列強協調から対米協調へ」260-3頁。
- 184 『外文』7—2—下、811-2頁。『後藤伝』3巻838頁。
- 185 1918年7月7日付後藤新平宛寺内正毅書翰、『後藤伝』3巻839頁。
- 186 『寺内日記』1918年1月28日条。
- 187 『寺内伝』915-916頁。
- 188 『後藤伝』3巻879-80頁。
- 189 「西比利亞出兵論」、「寺内文書」441—10—(へ)、『寺内内閣』下巻460-5頁。前掲、原『シベリア出兵』289頁。ただし、未解決問題が解決されれば、「疾風迅速一髪ノ機ヲ誤ラスシテ大挙出征セサルヘカラス」としている。
- 190 「対露策」、「寺内文書」441—10—(ト)、『寺内内閣』下巻5-6頁。前掲、細谷『ロシア革命と日本人』39-40頁。
- 191 「逸話零聞」『寺内伝』181-182頁。
- 192 「逸話零聞」『寺内伝』182-185頁。